第 2 部　グループセッション
「デ活の新たなステージ・分科会から共通テーマ部会へ
『共通テーマ部会 A～ゆれの状況を把握する～』が目指すもの」

木村　玲欧（共通テーマ部会 A 推進役/ 兵庫県立大学環境人間学部 教授）

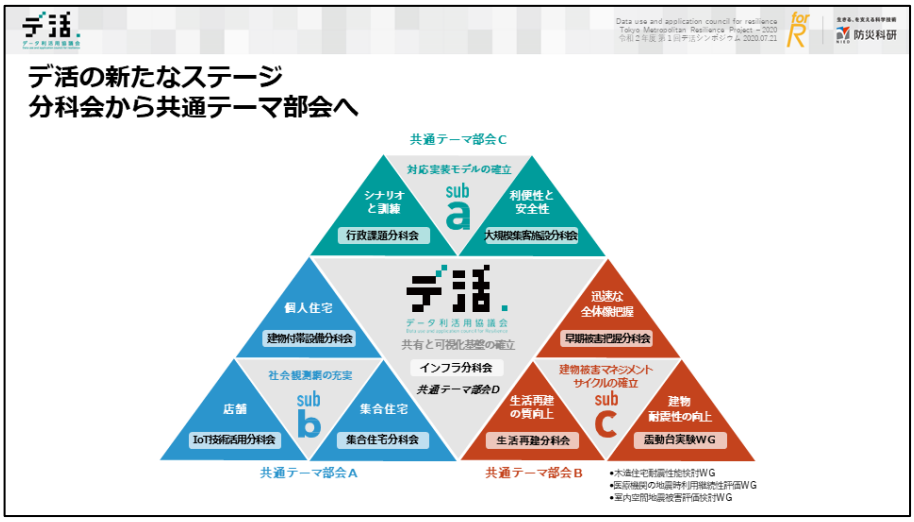
（司会：下村）　第 2 部はグループセッション「デ活の新たなステージ・分科会から共通テーマ部会へ」ということですが、平田先生、これはどのようなセッションですか。

（平田）　デ活の中には、大きく四つのテーマ別の研究グループがあります。今回は、そのうちの一つで行われた議論の結果を紹介していただきます。研究者と民間が力を合わせているところを、ぜひ見ていただきたいと思います。

（司会：下村）　共通テーマ部会 A の皆さんは、「揺れの状況を把握する」をテーマに取り組んでいらっしゃいます。今から、その中の各分科会で取り組まれている事例を紹介していただきたいと思います。

まず、共通テーマ部会 A 全体の推進役である兵庫県立大学の木村先生に、何を目指しているのかというお話を頂きたいと思います。

(木村)　図表 1は三角形がたくさんありますが、色付きの三角形一つ一つが分科会といわれているものです。データ利活用協議会では、研究を効果的に進めるために、研究テーマごとの分科会という形で研究活動をしています。



1

さらに、共通したテーマを持った分科会が一つに集まり、共通テーマ部会という、もう一つ大きな研究の塊をつくっています。

左下にある水色の三角形の三つが、これから発表する共通テーマ部会 A、右下のオレンジ色の三角形の三つが共通テーマ部会 B、上の方にある緑色の三角形の二つが共通テーマ部会 C です。この三つの大きな共通テーマ部会で研究を進めています。またそれとは別に、A～C のそれぞれの共通テーマ部会に接している形で「デ活」という大きな灰色の三角のところでは「インフラ分科会」が活動しています。本日は、水色の共通テーマ部会 A から、IoT 技術活用分科会、建物付帯設備分科会、集合住宅分科会の順番で発表したいと思います。

共通テーマ部会 A は、地震の揺れをどのように災害対策・防災に生かすかということを研究テーマにしています。IoT 技術活用分科会では、IoT 技術をどのように防災・災害対策に生かすことができるか、建物付帯設備分科会では、建物に付帯するさまざまな設備を、どのような揺れのデータを用いながら防災・災害対策に結び付けることができるか、集合住宅分科会では、集合住宅という特殊な環境を、どのように防災に結び付けていくことができるかという研究を進めてきました。

（司会：下村）　平田先生、図を見ていて素朴な質問があります。去年まで参加されていた方は特に疑問に思ったかもしれませんが、サブプロ（a）（b）（c）と、共通テーマ部会 A、B、C が一つずつずれているのはなぜですか。サブプロ（b）が共通テーマ部会 A、サブプロ（c）が共通テーマ部会 B、サブプロ（a）が共通テーマ部会 C というように、呼称のアルファベットが左に三分の一回転しているのは、何か意味があるのですか。

（平田）　研究の仕方としては、災害に対応するということが一番にあり、そのために理学サブプロ（b）と工学のサブプロ（c）が連携しています。社会科学がサブプロ（a）です。ただし、今度の分科会では揺れの理解を最初にやることになったので共通テーマ部会 A が左に 120 度ずれた形になりましたが、それほど深い意味はありません。建物は、個人の建物、店舗、集合住宅という三つの大きなくくりがあり、それぞれに対応した分科会があります。それを共通テーマ部会ということで、ひとくくりにしてあります。

（司会：下村）　去年からサブプロジェクトに関与している皆さん、混乱のないようにお願いします。それでは、左下の共通テーマ部会 A の各分科会の皆さんに、活動内容についてお話しいただきたいと思います。

最初は IoT 技術活用分科会です。分科会長であるセブン-イレブン・ジャパンの西村さんからご報告を頂きます。